

「ボエ協奏曲」は実演では初めて聴いたが、3つのテーマを元に展開させる構成の巧みさもさることながら、それぞれのテーマ表現の自在さや圧巻の大力デンツァなど、倉澤の新人とは思えぬ非凡な表現力を感じさせるものがあった。 ●齋藤弘美

打管 三戸素子 vn

1月20日・東京文化会館〈小〉 ●J・S・バッハ「無伴奏ヴァイオリン・ソナタ第3番」、プロコフィエフ「無伴奏ヴァイオリン・ソナタ」、J・S・バッハ「無伴奏ヴァイオリン・パルティータ第2番」

国際的な活躍と共に柔軟な編成を繰り出す「クライネス・コンツェルトハウス」も主宰する、日本を代表するヴァイオリニストの一人。モーツァルト、ベートーヴェンをはじめ多様な作品で高い評価を受けているが、今回の無伴奏は、限定するわけではないが、優れたバッハ弾きと言えるほど、確固とした物語が作曲家の言葉と重なるようにして熱く響いた佳演だった。

「パルティータ第2番」の「シャコンヌ」第3部、二短調に戻り終盤で執拗に繰り返されるイ音の力強さと勢い。三声はこの「シャコンヌ」に、イエス・キリストが「ゴルゴダを登り、述懐し（長調部分）、再び死に向かう現実を二短調に読み取っている。いよいよ死へと向かう第3部も終盤で反復される、涙の滴りを描く同音反復でのいや増す熱量と響き渡る美音は、鳴りやまぬカーテンコールが象徴しているよう、心を捉えて止まなかった。「宗教面から聴く必要はない」（パンフ）し象徴的なフィグーラを基軸にばかり聴く必要もないかもしれないが、第1部の短調32分音符の緊迫から長調に転じたときの安寧に満ちた柔和な音色、そして二長調部分

のクライマックスを成した同音連打、リズムカルなクーラント、粘らないサラバンド、走り騒がず軽快な躍動感の覆うジグ等、見事な構成力で「シャコンヌ」に至っている。ソナタから「来たれ、創造主なる聖霊」を主題に含む冒頭に据えた「第3番」での、清澄なほど透明感を湛えた音色による多声と対照的に、ソリストとトゥッティが掛け合う楽しさを鮮やかに弾き分けたプロコフィエフ。高度なプログラミングでの稀有のJ・S・バッハを聴いた。 ●小倉多美子

打管 sax 埴美里

1月21日・東京オペラシティリサイタルホール ●AKIマツモト (p) ●J・S・バッハ「フルート・ソナタ」BWV1033、メシアン《黒づくみ》、野田燎《不死鳥》、池辺晋一郎《沈黙：おや、どこやらでほととぎす》、シヨー「Do Not Stop on the Highway to View Fire」、ラヴェル《三羽の美しい天国の鳥》《クーブランの墓》、他「鳥」をメインテーマにした埴美里(sax)の「B+C」。開演前と休憩時に鳥のさえずりを会場内に流し、照明演出にもこだわるステージは、同シリーズの中でも異彩を放っていた。まずは軸となるJ・S・バッハだが、比較的新しい楽器のサクソフォーンではややハンデを負うものの、フルート作品をソプラノ・サクソフォーンで取り上げたのは興味深い。演奏は様式を意識したというより、彼女自身の色に染め上げたといえ、その語り口は、冒頭より積極的に聴衆へと働きかける。また鋭角的な響きのソプラノだが、埴の音色にはふくよかさがあり、彼女の持ち味をアピールした。前後半を通じて心に残ったのは、埴の委嘱で世界初演となった女流作曲家シヨンの作品。女流ならではの色彩感とともに、それを豊